

AL NEWSLETTER

Volume 3, Issue 1

Winter, 2015

～ 目次 ～

- ◆ ニュース (p. 1)
- ◆ アクティブラーニングニュースレター (p. 1)
- ◆ アクティブラーニングとは？ (p. 1)
- ◆ 効果的なピアレビューの方法 (p. 2)
- ◆ アクティブラーニング部門セミナー (p. 3)
- ◆ 全学自由研究ゼミナールの紹介 (p. 5)
「アクティブラーニングで未来の学びを考える」
- ◆ 全学自由研究ゼミナールの紹介 (p. 7)
「大学の教育を変える学びのフィールドワーク」
- ◆ KALS TA からひとこと (p. 8)
- ◆ アクティブラーニング部門とは？ (p. 8)

◆ ニュース

・「授業相談」始めました

アクティブラーニング部門では、授業に関する支援をしております。授業でお困りの方、より良い授業を作りたい方、お気軽にご質問・ご相談いただければ幸いです。

連絡先: kals@kals.c.u-tokyo.ac.jp (担当: 吉田)

・アクティブラーニングの方法を学ぶ

動画を作成しました

アクティブラーニングの方法であるポスターツアー、ジグソー法、ピアレビューに関して、その方法を学べる動画を作成しました(図1)。東大TVにて年度内に公開いたします。



図1 アクティブラーニング動画の一場面

◆ アクティブラーニングニュースレター

学習効果を高める方法の一つとしてアクティブラーニング(能動的学習)があります。アクティブラーニングはKALS(駒場アクティブラーニングスタジオ、東京大学 駒場キャンパス 17号館2階)やK201(東京大学 駒場キャンパス 21KOMCEE 2階)など、特別の設備を備えたところで行うこともありますが、通常の教室空間でできるものもあります。授業の一部にそのような活動を取り入れてみようという時の参考になるように、本ニュースレターでアクティブラーニングのさまざまな方法や関連する話題をお知らせすることにしました。本ニュースレターをお読みになり、気になる記事がありましたら、アクティブラーニング部門までお問い合わせください。アクティブラーニング部門ではアクティブラーニングの支援を行っております。(山口)

◆ アクティブラーニングとは？

アクティブラーニングとは、データ・情報・映像などのインプットを、読解・ライティング・討論を通じて分析・評価し、その成果を統合的にアウトプットする能動的な学習のことです。

講義でのインプットに対して、試験や課題でアウトプットすることは普段から行われていると思いますが、それだけで深い理解を獲得させるのはなかなか困難です。アクティブラーニングでは、その途中で読解・ライティング・討論など、学生が中心になって行う活動を取り入れることにより、より深い理解を獲得させるものです。一人で読んだ時は気がつかなかった観点を他の学生の見方から知ったり、他の学生の発表に質問したりすることでより広がりをもって問題を捉えることができるようになります。

単に討論をすればアクティブラーニングになるわけではなく、どのように進めれば有効かについてさまざまな知見があります。このニュースレターでは、そのような方法を毎回いくつか紹介して行く予定です。(山口)

◆ ピアレビューの効果的な導入方法

ここでは、学生同士が相互に評価しあうピアレビューの効果的な導入方法について紹介します。課題の成果物に対する評価は教員が行うものだと考えられていますが、学生同士で行うこともできます。また、学生が相互に評価するピアレビューは、教員および学生の両者にとってメリットのある方法です。教員にとっては、学生が行った評価を参考にしながら最終的な評価ができるため教員の負担は減ることが期待されます。また、学生にとっては評価をうけるだけではなく、他者の成果物に対する評価をすることで、自身の成果物の質が向上することも示されています (Lundstrom & Baker 2009)。

ここで、学生同士に評価させる場合、評価の妥当性や信頼性に問題が生じることを懸念される方もいらっしゃるかと思いますが、適切な方法を用いることで、その点を補うことができます。以下、ピアレビューの手順および効果的な実施方法をご紹介します。

・ピアレビューの手順

ここでは課題をレポートだとしてピアレビューの流れを説明します。まず、学生はレポートを作成します。次に、そのレポートを学生同士で交換し合い、お互いのレポートを評価します。そして、その評価を元に課題を改善するという流れです。ピアレビューは、レポートのみならず、プレゼンテーションやポスターなど幅広い課題の成果物に応用できます。より具体的な手順に関しては、本部門が提供している「+15 minutes」の冊子をご参照ください。

・効果的な実施方法

授業にピアレビューを効果的に導入するためには、いくつかおさえるべきポイントがあります (Topping 1998; Dochy, et. al. 1999) が、下記の2点が特に重要になります。

- ピアレビューの評価観点を示す
- ピアレビューの練習の機会を設ける

以下、それらについて詳しく説明します。

1点目はピアレビューの評価観点を明確に示すことです。そうすることで、学生は評価のポイントを学び、課題において重視すべき点を明確に理解することができます。また、教員と学生の評価観点が共有されることから、学生による評価であっても、その妥当性や信頼性は高まります。実際、評価観点が明確に提示されることで、課題の成果物に対する学生による評価と教員による評価の相関が高くなることが示されています

(Flachikov & Goldfinch 2000)。このように、

ピアレビューにおいて課題における評価ポイントを明示することは非常に有用です。

ここでは、評価観点を示す効果的な方法として、ルーブリックを紹介します。ルーブリックとは、課題の成果物の評価観点と評価基準が明示されたシートです。評価基準とは、どのような内容であれば低評価、高評価なのかが記述されているものです。例えば、レポートのルーブリックで、「構成」という評価観点があつた時に、単なるチェックシートであれば、その観点に対して1~5点の範囲でそれぞれの学生が点数をつけます。一方、ルーブリックでは「それぞれの文章の関係性が明確で一貫性がある」ものが5点、「それぞれの文章の関係性が不明確で一貫性がない」ものが1点というように、配点の根拠を明示します。評価観点のみを提示することも有用ですが、さらに評価基準も提示するルーブリックは学生の学びをさらに促すことが期待されます。是非ルーブリックをご活用ください。ルーブリックの作り方に関しては書籍「大学教員のためのルーブリック評価入門」(佐藤ら 2014)が参考になります。

2点目は、非常に重要ですが見落とされやすい、ピアレビューの練習についてです。実は、ピアレビューを導入したとしても、相互のフィードバックが実際の成果物の改善につながっていないことが指摘されています (Min 2006)。その理由としては、学生が行うフィードバックの内容が具体的でなく、改善につながりにくいためだと考えられています。実際、台湾人の学生が英語でエッセイを書く際に、ピアレビューの練習をしなかった場合はピアレビューをしても全体の約10%しか成果物の改善が見受けられなかったのに対して、練習した場合は、全体の約70%に成果物の改善がみられたことが示されています (Min 2006)。

具体的なピアレビューの練習においては、以下の項目がポイントになります。

- 教員がピアレビューの実演をする
- 評価観点を元に学生が成果物を評価する
- 学生の評価に教員がフィードバックする

参考のため、実際に Min らがエッセイのピアレビューの練習で用いていた方法 (Min 2006) を紹介します。教員による実演に関しては、4つのステップで行われました。

1. 文章から著者の意図を理解する
2. 文章の問題点を見つける
3. どの点が問題かを明確に指摘する
4. 具体的な改善案を提示する

上記のステップについて実演をみた後、学生はこれらのステップを意識してピアレビューを行

い、その評価に対して教員がフィードバックするという流れでした。このように、作成者の意図を理解して問題点および具体的な改善策を提示する練習をしてもらうことで、学生が具体的にピアレビューをどのように行えばよいのかを理解することができます。そして、それが課題の成果物の改善につながる事がわかっています。

・まとめ

本稿では、ピアレビューの効果的な実施方法について紹介しました。具体的には、以下の項目が実施において重要です。

- ピアレビューの評価観点を示す
- ピアレビューの練習の機会を設ける

評価観点を示す時は、評価基準も記載されているルーブリックが活用できます。また、ピアレビューの練習としては、まず教員が実演し、学生に評価してもらい、その評価に対して教員がフィードバックすることが肝要です。

このような効果的なピアレビューを授業に取り入れて、学生の学びを深めていただければ幸いです。より具体的な方法やポイントについて質問などございましたら、お気軽にアクティブラーニング部門にご相談いただければ幸いです。(吉田)

・参考文献

Dochy, F. J. R. C., Segers, M., & Sluijsmans, D. (1999). The use of self-, peer and co-assessment in higher education: A review. *Studies in Higher Education*, 24(3), 331-350.

Falchikov, N., & Goldfinch, J. (2000). Student peer assessment in higher education: A meta-analysis comparing peer and teacher marks. *Review of educational research*, 70(3), 287-322.

Lundstrom, K., & Baker, W. (2009). To give is better than to receive: The benefits of peer review to the reviewer's own writing. *Journal of Second Language Writing*, 18(1), 30-43.

Min, H. T. (2006). The effects of trained peer review on EFL students' revision types and writing quality. *Journal of Second Language Writing*, 15(2), 118-141.

Topping, K. (1998). Peer assessment between students in colleges and universities. *Review of educational Research*, 68(3), 249-276.

佐藤浩章監訳ほか (2014) . 大学教員のためのルーブリック評価入門. 玉川大学出版部

◆ アクティブラーニング部門セミナー

アクティブラーニング部門では、教育方法と関係のある内容のセミナーを開催しています。ここでは、2015年11月12日(木)に行われたセミナー「産学連携型プロジェクト学習によるリーダーシップ教育の実践: 立教大学ビジネス・リーダーシップ・プログラムの事例から」について報告いたします。立教大学ビジネス・リーダーシップ・プログラム (BLP) を運営されている立教大学経営学部の館野泰一先生を講師としてお招きしてお話いただきました(図2)。また、実際に BLP を受講し、BLP の学生アシスタント (SA) として活動されている経営学部2年牛込公美子さんと安藤沙紀さんにもお越しいただきました。

また、本セミナーは、本部門が実施している全学自由研究ゼミナール「アクティブラーニングで未来の学びを考える」の授業も兼ねており、当日は、受講生である学生が6名、希望された教員5名が参加してくださいました。

・セミナーの構成

本セミナーでは、まず BLP と BLP において重要になるリーダーシップに関するレクチャーがあり、その次に BLP の一部をミニ体験しました。そして、再度 BLP のデザインに関するレクチャーがあり、最後にセミナーを振り返るためのディスカッションが設けられました。

・BLP の概要

BLP は立教大学経営学部経営学科の1年生の春学期から3年生の春学期まで、5学期2年半をかけて行われるプログラムであり、立教大学に経営学部が設置された2006年から開始されました。「権限がなくても発揮できるリーダーシップの涵養」を目指しており、自ら目標設定をして、自らすすんで前に立ち、さらに同僚を支援する学生を育むことを教育目標としています。アクティブラーニングを取り入れた授業設計で、産学連携のプロジェクトを実行する授業とスキルを強化する授業で構成されています。1年生は春学期に「リーダーシップ入門 (BL0)」の受講を通して課題解決のプロジェクトを行い、秋学期には BL1 で論理的思考力を養うため、ライティングスキルを強化し



図2 セミナーの様子

ます。2年生の春学期にはプロジェクト型授業、秋学期にはスキル強化型授業、3年生の春学期にはプロジェクト型授業と、2年半をかけて、プロジェクトの実行とスキルの強化を交互に行うプログラムになっています。

その成果は高く評価されており、文部科学省の質の高い大学教育推進プログラム（教育GP）では「特に優れており波及効果が見込まれる取組」に認定され、教育再生実行会議の第7次提言では大学のアクティブラーニングの先行事例としてただ1つ紹介されました。

・授業「リーダーシップ入門（BL0）」

本セミナーでは、特に重要な1年生の春学期に行われる「リーダーシップ入門（BL0）」について説明されました。BL0は立教大学経営学部の1年生約400名が受講する授業で、1クラス約20名、全18クラスで行われます。

BL0の受講を通して、学生が実際にプロジェクトを行うという経験することで、他の授業で学ぶ専門知識の必要性を知ってもらうことが期待されています。授業内容は、学生がビジネスにおける課題に対してグループで取り組むというもので、実際の企業と連携して課題設定が行われ、最終的には選ばれた学生のグループが企業の方々の前でプレゼンテーションを行います。授業を通して、学生たちはそれぞれのリーダーシップを発揮する必要があり、リーダーシップの教育が重要になってきます。

・リーダーシップとBL0の設計

リーダーシップと聞くと、明確なビジョンを打ち出して、全員を強く引っ張るリーダーが発揮するものというイメージがありますが、それだけがリーダーシップではありません。正式に任命されたリーダー以外のメンバーが誰でも発揮できるリーダーシップもあります。そこで、200ほどリーダーシップの定義がある中、BLPでは最小限身に付けるべきリーダーシップを「目標設定・共有」「率先垂範」「同僚支援」の3要素に絞り込みました。つまり、BLPは、明確な成果目標を設定および共有し、率先して模範となる行動をとり、同僚が動きやすいように働きかけるリーダーシップを身につけるよう設計および実施されています。

そのようなリーダーシップを身に付けるため、経験と振り返りの両輪をまわす授業構造になって

います。構造は「目標設定」「経験」「ふりかえり」の3要素から成り立っています（図3）。目標設定では、リーダーシップをどのように発揮するかといったリーダーシップ目標の設定を行います。そして、経験では、リーダーシップが必要になるビジネスプランを提案するプロジェクトを実際に体験します。そして、ふりかえりでは、学生が相互にリーダーシップ行動に対してフィードバックし、そのフィードバックを元に目標を振り返り、次の行動計画を立てます。このように、目標を立てて、経験し、体験して、そのまま終わるのではなく、そこからさらに振り返り、それを次につなげる構造となっています。次にご紹介するBLPミニ体験も同様の構造となっていました。

・BLPミニ体験

BLPの説明後、セミナー参加者もBLPをミニ体験できる時間がありました。課題は「訪日外国人旅行者によってあなたの地元が活性化する新たな仕組みを提案せよ！」というビジネスプランを3人1グループで考えて提案するものでした。グループメンバーの出身地から地元を1つ決定し、海外の国を1つ決め、その国の人々を地元と呼び寄せるビジネスプランを考える課題でした。

課題に取り組む構成も、BLPと同様になっており、まずはグループメンバーが各自リーダーシップ目標を決め、共有しました。その後、実際にビジネスプランの作成にグループで取りくみ、全体で発表しました。そして、グループ内でメンバーがリーダーシップ目標に対して相互にフィードバックしました。以下、詳細について説明します。

まず、参加者はそれぞれグループワークにどのような貢献をするか、具体的なリーダーシップの行動に関する目標を設定し、共有しました。「話がそれないように良い感じに話をまとめたいな」といったラフな目標や「積極的なアイデア出しと議論の促進をします」といった目標が挙げられ、グループ内で共有されていました。

そして、各グループは、活性化する地元と対象となる外国を決め、ビジネスプランを作成しました。例えば、千葉県とインド、東京都とアメリカ、下北沢とアメリカといったように、色々な組み合わせが生まれ、それぞれの地元や国の特徴を活かしたビジネスプランが作られました。

発表では、全体に対して各グループがビジネスプランを共有し、投票が行われ、3つのグループが同率1位になりました。アメリカの若者を対象に神社でファッションショーを行う「下北インターナショナルファッションコレクション」がその1つで、他にも特色豊かなビジネスプランでした。

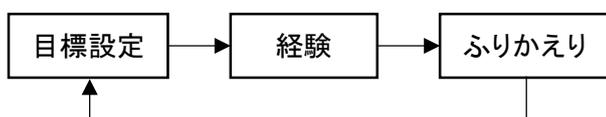


図3 授業の基本構造

そして、最後に、グループ内で、グループワークでのそれぞれの行動を思い出し、元々共有したリーダーシップ目標が達成できているかを振り返りました。例えば、議論を促進するという目標を共有していたメンバーには、「途中で意思決定して、議論を次の段階に進めてくれたのが良かった」といったフィードバックがありました。

・ディスカッション

BLP のミニ体験を経て、参加者はそれぞれのグループで、このセミナー全体を振り返りました。各グループには、セミナーの講師か BLP の SA が入り、実際の BLP の様子や運営に関する質疑応答なども行われていました。ある学生は「(立教大学には)このようなプログラムがあって羨ましい。東大にはないのか?」と BLP の価値を高く評価し、本学にもこのようなプログラムを導入してほしいと話していました。

・受講者によるアンケート

学生からは「参加者全員にリーダーシップを身に付けてもらうという考え方が印象的でした。様々な場面で努力が認められることで、自分にはリーダーが向かないと思っている学生も徐々に自信を付けられるのだなと思いました。」といったコメントがあり、全体的に肯定的な感想でした。

また、教員からは「SA の方の話が聞けたことがとても良かったです。SA を体験することまでセットで、学びが深まるという部分の大きさを再認識しました。」や「リーダーシップ教育とアクティブラーニングの重要性を再認識しました。楽しい、また参加したいです。」といった SA、リーダーシップ、アクティブラーニングの重要性に関するコメントがあり、全員が肯定的な感想でした。

・筆者の感想

レクチャーと体験が絶妙にブレンドされたセミナーになっており、参加者も非常に満足していましたし、見学していた私も非常に楽しませていただきました。リーダーシップを学ぶ上で、体験と振り返りが重要だということが強く印象に残っています。BLP のミニ体験でも、体験(ビジネスプラン作成)と振り返り、という構成がとられていたのに加えて、セミナー自体も、BLP のミニ体験と振り返り(ディスカッション)、という構成がとられており、非常に一貫性の高いセミナー構成だと感じました。体験と振り返りが大事だと単に伝えるだけでなく、受講者が実際にセミナーおよび BLP のミニ体験で体験と振り返りを実践できる素晴らしいセミナーでした。有意義なセミナーを行ってくださった館野先生、SA の牛込さんと安藤さん、誠にありがとうございました。(吉田)

◆全学自由研究ゼミナール「アクティブラーニングで未来の学びを考える」

アクティブラーニング部門では 2014 年度より全学自由研究ゼミナール「アクティブラーニングで未来の学びを考える」を開講しています。この授業では、アクティブラーニング手法を用いた授業を展開しており、前半の授業では学習観や背景理論、教材・実践について概観し、それらを踏まえて最終的にはグループで「未来の学び」を実践して貰うことで、「学び」についての考えを深めることを目指しています。各回の授業概要を表 1 に示しました。

本講では、前半で行ういくつかの講義の流れ、ゲスト講義、学生たちの実践、学生の反応の 4 つの観点からこの授業の概要を説明します。

表 1 「AL で未来の学びを考える」授業概要

回	タイトル(授業手法)
1	ガイダンス
2	学びとは何か?(ミニワークショップ/講義)
3	3つの学習観(ジグソー法)
4	ICTを用いた学び(講義/教材体験)
5	新しい能力と経験学習(講義/教材体験)
6	学習空間・活動・共同体(ジグソー法)
7	最先端の学びを調べよう!(発表)
8	ゲスト講義①(詳細は後述)
9	ゲスト講義②(詳細は後述)
10	未来の学びを考えよう(グループワーク)
11	ワークショップの準備(グループワーク)
12	未来の学びの実践(ワークショップ)
13	リフレクション(グループワーク)

・講義の流れ

講義のうち 2 回では、ジグソー法と呼ばれる協調学習手法を用いた授業を実施しています。ジグソー法では、まず学生が「専門家グループ」を組み、グループごとに決められたトピックについて学習した後に、それぞれトピックを学習した「専門家」が 1 人ずつ集まる「ジグソーグループ」を作成します。ジグソーグループの中で、それぞれの学生が自分が学習した内容の「専門家」として、他のメンバーに説明を行います。そして、最後にグループで知識の全体像についてディスカッションを行います。ジグソー法は、複数のトピックを学習し、教え合うことで内容に関する深い理解を促すことが出来る手法です。

講義では「学習観」と「空間・活動・共同体」をテーマにし、「学習観」の講義では学生を「行動主義」「認知主義」「社会構成主義」の 3 つの専門家グループに分けて学習を行い、それぞれの

内容をジグソーグループで説明し合った後、3つの主義の歴史的変遷や関係性についてディスカッションする授業を行いました。学生にとって、自分が学んだことを他者に説明する活動は刺激的だったようで、集中して学習できたという意見や、もっと上手く説明できるようになりたい、などの感想がコメントシートに書かれていました。

・ゲスト講義

授業では毎期1～2名程度、先進的な学びの実践者の方をお呼びするゲスト講義を実施しています。2015年度Sセメスターでは、NPO法人Collable代表の山田小百合さんをお呼びし、インクルーシブワークショップを実施して頂きました。

Collableは「多様性を歓迎する社会の創造」をビジョンとし、障害のある人もない人も「ともに」創造し活動するコミュニティづくりを支援することを目指すNPOです。

授業では、目の見えない人にとって自分を表現する「名刺」とはどのようなものかを考えて制作する「見えない名刺をデザインするワークショップ」を実施して頂きました。普段、名前や肩書きが載っているものと何となく思っている名刺ですが、目が見えない人に自分のことを伝えると考えると、「出身地の形」を紙を切ってデザインする学生や、「所属サークルで使う道具」を表現する学生など多様な観点から名刺作成が行われ、お互いについての理解も深まりましたし、普段当たり前前に思っていることを疑う視野が養われました(図4)。



図4 ワークショップの様子

・学生たちの実践

授業の後半では、学生達に「自分たちが実現したい未来の学び」を考えて実践する活動を行って貰っています。これは普段は学習者の視点だけしか持っていない学生に、授業者の視点からも「未来の学び」について考えてもらうことを目的にしています。

2014年度に行われた学生達の実践例を1つご紹介します。あるグループでは、小学校の社会の授業に「ジグソー法」を取り入れるとどのようなことが出来るのかを考え、「ジグソー法とすごろく」を融合させた実践を考えました。これはまずジグソー法で織田信長、豊臣秀吉、徳川家康の3人を学んだ後に、それぞれに関するすごろくを作成し、お互いが作ったものを遊ぶことで、楽しみながら担当しなかった武将に関する知識を得ることが出来るというものです(図5)。



図5 学生の成果物

1, 2年生が2週間ほどで設計したこともあり、ファシリテーションなどに課題もある実践でしたが、初めて多人数になにかを教えるという経験をした学生も多く、得るものが多かった様子でした。

・学生たちの反応

受講した学生たちの反応としては毎学期良いものが得られています。コメントシートに記載されている、授業で特に身についたとしている能力や意識としては、「教育に対する興味・関心」、「(アクティブラーニングを含む)学習に対する知識や意欲」、「他者とディスカッションする能力」などが多く見られました。

授業者としても、回が進むごとにグループでのディスカッションは内容が濃いものになっており、また初回ではほとんど話せなかった学生の発言量も徐々に増えていくのが感じられ、受講生の反応と同様のことを効果として感じました。

授業で活用したジグソー法などの手法に関しては昨年度部門で作成した「+15 minutes」という冊子に実施方法を詳しくまとめました。アクティブラーニング部門のHP (<http://www.kals.c.u-tokyo.ac.jp/dalt/15-minutes/>)からダウンロードできるほか、KALSにて冊子もお配りしておりますので、ご興味がおありの方はアクティブラーニング部門までご連絡ください。(福山)

◆ 全学自由研究ゼミナール「大学の教育を変える学びのフィールドワーク」

アクティブラーニング部門では、2015年度A Semesterより、「大学の教育を変える学びのフィールドワーク」と題する全学自由研究ゼミナールを新たに開講しました。この授業では、大学内外の学びの場におけるフィールドワークを通じて、多様な学習環境や学習デザインを知り、大学教育のあり方について自らの考えを深めることを目的としています。

ここでは授業の概要や授業を受けた学生の感想を担当教員の感想を交えつつご紹介したいと思います。

授業ではまず大学における教育改革の動向や、参加・体験・活動をとまなう大学内外の学びのあり方について講義をおこないました。講義内容に対する理解を深めるため、「高校までの教育と大学教育との違い」「大学の特徴と役割」といった講義内容に関連するテーマを取り上げ、これらのテーマについて自らの考えをまとめたり、それを全体で共有したりするワークもおこないました。

大学内外の学びに関する考えや理解を自らの問題関心に沿って深められるように、フィールドワーク先となる「学びの場」は、学生自身に選んでもらいました。学生が調査対象に選んだのは、大学が提供する公開講座、ファカルティ・ディベロップメント (FD) 研修会、大規模オンライン公開講座 (MOOCs)、英語での授業や留学支援、外国人学校における日本語教育、高校や企業が実施するインクルーシブ教育などでした。

フィールドワークを円滑に進められるように、観察・インタビュー・質問票の作成方法に加え、アポイントの取り方やフィールドワーク先でのマナーなどに関する講義もおこないました。質問票作成やアポイント取得については、適宜、担当教員がサポートしました。またフィールドでのインタビューに備えて、学生同士でペアになって相互にインタビューをおこない、気づいた点を互いにフィードバックするワークも取り入れました。

授業では他者と協力して課題に取り組む力を身につけることも重視したため、課題である最終発表は、個人ではなくチームでおこないました。適切なチーム編成ができるように、各自の問題関心を共有する機会を、授業の進行過程で何度か設けました。その結果、「大学教育」（公開講座、FD研修会）、「グローバル化への対応」（英語での授業、留学支援、日本語教育）、「多様性への対応」（インクルーシブ教育、MOOCs）をテーマとする3つのグループが結成されました。

最終発表では、フィールドワークを通じて明らかとなった多様な学びの理念や目的、学習環境、

講師の工夫、学習者の立場や動機、講師-学習者および学習者-学習者間の相互作用などに関する考察結果が述べられ、それをふまえた学生目線での「新しい大学像」などの提案がなされました。

最終発表では、学生自らが作成した評価指標（ルーブリック）を用いて相互評価もおこないました。本ニュースレターの「ピアレビューの効果的な導入方法」（p.2）でも紹介したように、ルーブリックとは、課題の評価観点と評価基準を明示した表のことです。ルーブリックは教員が学生を評価する際に用いることもできれば、学生が課題に取り組むためのガイドにしたり、自身の達成度合いを評価したり、ほかの学生を評価したりするのに用いることもできます。一方、ルーブリックは、評価者の主観が入るなど信頼性の確保が難しい、学習者がルーブリックにある評価の観点を意識して課題に取り組み、学びの範囲が制限されてしまうといったデメリットも指摘されています（山田ほか 2015）。授業ではこうしたメリットとデメリットを理解した上で、ルーブリック作成のワークを実施しました。学生のルーブリック作成への参加は、学生が授業やフィールドワークを通じて学んできたことを振り返るとともに、評価者の視点をもてるようになるという点において有益であったと感じています。

授業では、大学外の学びに触れる機会として、ゲスト講師を招いたワークショップ形式の講義も実施しました。民間学童保育と学習塾を兼ねたネクスファ副代表の辻義和氏と社会人を対象にリーダーシップに関するワークショップをおこなう東京アキュメン代表の灘仁美氏にご登壇いただきました。



図6 灘仁美氏によるワークショップ

辻氏のワークショップでは、ネクスファの学習塾で提供されている「サス学（サステナビリティ学習）」という探求型学習プログラムを実施いただきました。サス学は、受講生が様々な社会問

題を“ジブンゴト”として捉えられるように、社会問題との“つながり”を体感し、問題に対する自分の考えを自らの言葉で表現できるようになることを目指しています。学生はワークショップへの参加を通じて、こうしたサス学の理念や目的がプログラムにどのように組み込まれているのかを学びました。また灘氏のワークショップでは、学生が実現したい夢を書き出し、そのために必要な活動や阻害要因のディスカッションを通じて、実現に向けたアクションプランを検討しました。これらのワークショップは、学びの場におけるファシリテーションや、学習デザインの多様性を知る貴重な機会となりました。



図7 辻義和氏と「問い」を探す学生たち

授業後に実施したアンケートでは、最も学んだこととして、「学びの形の多様性」、「フィールドワークで観察すべき対象を体系的に学んだ点」、「インタビューやアンケートをする力、またその知識と経験」といった講義テーマに関連する知識やスキルの習得をあげる学生や、「他者の考えを交えて自らの意見を推敲していくこと、その意見を誤解なく発信していくことの大切さ」といった協調学習の重要性をあげる学生がみられました。また、授業を受けたことで、「教育について深く考えるようになった」として、行動に変化がみられたと述べる学生もいました。さらに、「授業は教員だけが作り上げるものではなく、学生と教員が相互主体的に作り上げるもの」との認識が芽生え、来年度の授業支援を自ら志願する学生もみられました。

担当教員としては、授業設計やファシリテーションなどの面で反省もありますが、教員と学生が共に成長できる学びの場を提供できるよう、授業改善に努めていきたいと考えています。(小原)

・参考文献

山田ほか(2015). 学びに活用するルーブリックの評価に関する方法論の検討. 関西大学高等教育研究, 6, 21-30.

◆ KALS TA からひとこと

・ KALS TA の紹介

KALS と K201 には、授業を支援するティーチング・アシスタント(以後、KALS TA)がいます。今回のニュースレターでは、KALS TA である総合文化研究科修士課程2年生の宮川慎司さんの声をご紹介します。

・ KALS TA のひとこと

こんにちは、国際社会科学専攻の宮川慎司と申します。私は、夏学期から1年間TAを務めております。TAの業務は、機材の準備など、アクティブラーニングを行うための環境づくりをすることです。業務では、大きなオーディオ機器やクリッカー(匿名で投票する機器)など、普段は触ることがない機器の使い方を学ぶことができます。しかしTA業務の楽しみは、機材の使い方を学ぶことよりも、むしろさまざまな先生の授業を体験できることにあります。KALSで授業をなさる先生はみなさん授業に工夫を凝らしており、見ていて飽きることがありません。個人用PCや、移動可能な机を利用したグループ作業など、自由自在な授業に刺激を受けながら、半分授業に参加している気持ちで、TAの業務を行っております。

◆ アクティブラーニング部門とは?

アクティブラーニング部門は学部教育を教育工学の視点から支援することを目的として、2010年度に教養教育高度化機構に設置されました。その活動内容は、教養学部・情報学環・大学総合教育研究センターの共同プロジェクトとして2007-2009年度に実施された文部科学省現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代GP)「ICTを活用した新たな教養教育の実現-アクティブラーニングの深化による国際標準の授業モデル構築-」を継承し、発展させています。

また、全国の教育機関や教育関連の企業から年間30件余の見学を受け入れており、アクティブラーニングの実施モデルとしての役割も果たしています。

◆ 奥付

発行年月日：2016年2月2日

発行：東京大学 大学院総合文化研究科・教養学部
附属教養教育高度化機構アクティブラーニング部門
山口和紀、小原優貴、福山佑樹、吉田壘

連絡先：kals@kals.c.u-tokyo.ac.jp

Webサイト：

<http://www.kals.c.u-tokyo.ac.jp/dalt>